



## 「学んでみると気候学は おもしろい」

日下博幸 著

ベレ出版, 2013年 8月

264頁, 1,700円 (本体価格)

ISBN 978-4-86064-362-1

タイトルと著者名を見た瞬間、迷わず買ってしまった。

本書はベレ出版からシリーズで刊行されている「学んでみると〇〇学はおもしろい」の中の1冊である。ソフトカバーの四六判で読みやすい装丁となっており、個人的には、それだけでも手に取ってしまいそうになったが、何よりも著者の日下さんが書く気候学とはどんなものなのか、そこに強く興味をひかれ、素直に読んでみたいと思ったのだ。

著者は、都市気候や局地気象などの現象を研究対象とする気象モデルの専門家であり、世界的にも活躍されているこの分野の第一人者でもある。その著者が書いた気候学とはいったいどのような内容となっているのだろうか。

まずは、目次をみてみよう。

第1章「気候学と気象学」

第2章「日本の気候」

第3章「身近な気候」

第4章「世界の気候」

第5章「地球温暖化と都市の温暖化」

第6章「もっと気候を知りたい方へ」

評者は地理学科の気候学研究室の出身なので、気候学の本といえば、吉野正敏著「気候学」(大明堂)などが教科書としてすぐに思い浮かぶ。その内容と比べてみると、それほど大きく違わない(ある意味当然だが)。たとえば、第2章では、日本の気候を四季と気候区分にもとづく地域特性の観点から解説しているし、また第4章では、世界の気候分布とケッペン=ガイガーの気候区分について説明している。いずれも、具体的な事象や気象データを織り交ぜながらの説明は丁寧かつわかりやすい。

その一方で、これまでの気候学の教科書とひと味違ったところもみられる。いくつか紹介すると、まず第1章では、気候(学)と気象(学)の違いや気象の基礎について1章を使って説明している点である。本

学会会員のみなさんにとっては周知の内容ではあるが、気候学を初めて学ぶ、あるいは気候に少し興味があるという読者にとっては、このような丁寧な導入部分はありがたいはずだ。

次に、著者の専門である都市気候や局地気象などについて、かなりのページが割かれている点である。第3章では、大気境界層、海陸風、ヒートアイランド、盆地や山地の気候、局地風といった、読者にとっての身近な現象を解説するにとどまらず、そのメカニズムまで踏み込んで詳しく解説している。現象を理解できるとともに、読者の知的好奇心をも満たしてくれる。また、第5章では、一般の読者にとっても関心の高いいわゆる2つの温暖化(地球温暖化とヒートアイランド)を取り上げている。ここでも、温室効果のメカニズムから最新の温暖化予測の方法論など、基本的なことをしっかり説明することで、2つの温暖化についての理解を助け、ときどきみられる両者を混同するような誤解に読者がおちいらないようにしている。

最後に、第6章では、読者が気候の世界に一步入って来てもらえるよう、この類いの本には珍しい実践(ここでは、気候区分をしたり、観測をしたり)を促すページがある点である。また、「紙と鉛筆で計算してみよう」と題して、ヒートアイランドのシンプルモデルと温室効果の放射平衡モデルの計算をすることも勧めている。計算の詳細については、著者の研究室のホームページ(<http://www.geoenv.tsukuba.ac.jp/~kusakaken/>)にある「本には書けなかったこと」という中でわかりやすく説明されていることもうれしい。

本書全体を通して特徴的なのは、気候の基礎である気象について、本文はもちろんのこと、脚注も上手に使いながら解説がなされていることである。この点もこれまでの気候学の教科書にはそれほど多くのページは割かれていなかった点である。

本書を読み終えてみると、評者が気候学を学び始めたころ、さまざまな単純な疑問に直面していたことを思い出した。その当時、本書があれば、そうした疑問の解決や気候の理解に間違いなく一役買ったに違いない。本書は「基礎から楽しく学ぶ」をコンセプトとし、文書は平易でわかりやすく、数式もほとんどでてこないのも、理系文系を問わず読み進めることができる。さらに、シンプルな挿絵は、目に見えないため表現するのが難しい気象現象への理解を十分助けてくれている。そのような意味では、本書は初めて気候学を

勉強する人や気候（学）に興味がある人、気候の世界に足を踏み入れてみたいという読者には、まず最初に手にとってもらいたいと思う。もし、みなさんの回りにそのような人がいたらぜひ紹介してほしい1冊である。

著者は筑波大学の出身である。筑波大学といえば、前身の東京教育大学時代から多くの著名な気候学者を輩出してきた大学である。本書において著者が示した

気候学とは、そうした従来の気候学的内容を踏襲しつつも、現象の基本的な理解が進むように解説を加えた新しいスタイルに出来上がっている。もちろんこのスタイルは、本シリーズの読者層を想定したための配慮の可能性もあるが、著者の気候学に対する姿勢を垣間見たような気がする。

（長野県環境保全研究所 浜田 崇）